令和５年１２月２２日（金）

『闇夜（やみよ）の灯火（ともしび）』

作家五木寛之（いつき ひろゆき）さんの『人生の目的』という著書があります。今日は、第四章の最後の一部分を紹介します。ここでは、五木さんは、他力（たりき：他の力を信じる）のあり方を、遠くに見える灯火（ともしび）にたとえています。

いま私が闇夜（やみよ）の山道を、重い荷物を背負って歩いているとする。行く手は夜にとけこんで、ほとんど一寸先も見えない。手さぐりで歩きつづけるしかない有様だ。

しかも、足もとにはきり立った崖が谷底へ落ち込んでいるらしい。下のほうでかすかに響く水音は、谷の途方もない深さを想像させる。

目的地も見えない。うしろへ退くすべもない。といって、そのまま坐りこんでしまっても、誰も助けにはきてくれないだろう。進退（しんたい）きわまっても、行くしかないのだ。手で岩肌をつたいながら、半歩、また一歩とおびえつつ歩く。

私たちの生きている様子とは、およそかくのごときものだ。はっきりと周囲が見えていると思いこんでいる人でも、じつは何時間かあとには生を失うこともある。交通事故もある。突然の病死もある。犯罪や戦争や天災も予測しがたい。

私たちのなかで、だれひとりとして確実な明日が保証されている人間はいないのだ。そのことを暗夜の山中行にたとえてみるのである。不安と、恐怖と、脱力感で、体がふるえるのを感ずる。

しかし、そんななかで、ふと彼方の遠くに、小さな集落の明かりが見えたとしたならどうか。

いくべき場所、帰るべき家の灯火が見える。そしていつか雲間から冴えわたる月光がさしてきて、足もとの断崖の道も、山肌も、森も、くっきりと浮かびあがる。坂を歩く労苦（ろうく）には変わりはない。行く先までの距離がちぢまったわけでもない。荷物が軽くなるわけでもない。

しかし、人は彼方の灯火に勇気づけられ、月光に思わず感謝のため息をつくだろう。そしてふたたび歩きだす。それを他力というのではないか。私はそう考えたい。